

付論 2

伊勢湾沿岸地方における弥生前期の集団関係

—特に錯綜する遠賀川系土器集団をめぐって—

1) はじめに

日本列島のほぼ中央部に位置する伊勢湾沿岸地方は、遠賀川系文化が波及した東端の地である。しかし、それは三河地方以東に展開する伝統的な縄文晩期終末期文化と対峙せねばならない状況を必然的なものとした。当地方における弥生文化成立期の研究は、アプローチの方法は別として、この外来文化（弥生文化）と伝統文化（縄文文化）とが複雑に絡み合う様相を整理し、その具体像をいかに明らかにすることができるかという点に勢力が注がれてきた。また、この二つの大枠内部においても、その状況は一樣ではなく錯綜した集団関係の存在が指摘されているが、それらは小規模な調査と表採資料によって設定されたものであり、その実態の把握は困難な状況にあった。

近年、高蔵遺跡（名古屋市熱田区）、月縄手遺跡（名古屋市西区）、松河戸遺跡（春日井市）、山中遺跡（一宮市）、麻生田大橋遺跡（豊川市）、白石遺跡（豊橋市）などの発掘調査が行われ、新たな知見と良好な一括資料をもたらし、再び当該期の様相を再考する気運が盛り上がろうとしている^{▼1}。ここでは、特に遠賀川系土器を主体的に使用する尾張以西の遺跡を整理し、その集団関係を探ってみたい。

2) 遺跡の分布

伊勢湾沿岸地方における遠賀川系土器出土遺跡は100遺跡を超え、近年の発掘調査の増加に伴いさらに漸増する傾向をみせている。また、納所遺跡、上箕田遺跡、朝日遺跡、西志賀遺跡など、拠点集落と考えられ、学史上著名な遺跡も数多く分布しており、質・量ともに遠賀川系文化東端の地としてふさわしい内容を備えている。

▼1 1991年に長野市で『東日本における稲作の受容』（第1回東日本埋蔵文化財研究会）、1993年には豊橋市において『突帯文土器から条痕文土器へ』（第1回東海考古学フォーラム）と題するシンポジウムが相次いで開催されている。

■伊勢湾西岸地域

伊勢湾西岸地域は、地形的には丘陵・平野が南北に細長く展開する地域であり、主要な河川がほぼ10～20km間隔で東流する。

遠賀川系土器を出土する遺跡は、概ねこれら主要河川の流域に分布し、とりわけ、上箕田遺跡、納所遺跡など弥生時代全時期を通して拠点集落となる遺跡は、河川下流域の沖積地が開け、かつ海岸部に近い地点に位置している。

中央構造線に並行して流れる南勢地方の櫛田川・宮川流域には河岸段丘がよく発達し、河川を見おろす中位段丘および洪積台地上に遺跡は立地する。しかし、拠点集落となりうるような遺跡はみられず小規模な遺跡が点在する。また、それらの遺跡は突帯文期の遺物を出土する地域とほぼオーバーラップする傾向が認められる^{▼1}。

■伊勢湾東岸地域

伊勢湾東岸地域における地形的な特徴は、木曾三川によって形成された広大な濃尾平野の存在である。弥生時代の濃尾平野は現在の大垣市近辺まで湾入していたと推定され、犬山市を頂点とした扇形状に広がっていたと考えられる。また、その東側には丘陵状の洪積台地が展開する。

遺跡の分布は、まず当時の海岸線に沿った地域とやや内陸よりの一宮市周辺の自然堤防上に集中する。前者は朝日遺跡・西志賀遺跡など貝塚を伴ない弥生時代全時期を通して拠点集落となる遺跡が点在し、後者には単発的な遺跡が数多く分布する。また、名古屋台地には高蔵遺跡の存在が目立つ程度で遺跡の分布は少ない。

3) 集団関係の抽出

■分析手順

東海地方において弥生文化研究の先鞭をつけられた紅村 弘氏は、当該期の土器編年を構築するにあたり、第1類「正統」遠賀川式土器、第2類「亜流」遠賀川式土器、第3類「削痕」遠賀川式土器、第4類条痕文系土器、第5類大洞式に類似するものに分類された。これは土器の系統を念頭に置いたものであり、当地方の特性を明示する有効な分類方法であろう^{▼2}。この紅村氏の分類方法を下敷きに、以下のような、伊勢湾沿岸地方における弥生文化成立期の集団関係を抽出するための分析を行なった。

▼1 奥 義次1990「三重県における凸帯文系土器出土遺跡の分布相」『Mie History』vol. 1 三重 歴史文化研究会

▼2 紅村 弘1956「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代学研究』13
紅村 弘1981「東海地方弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸問題—本文 編—補足 改訂版

具体的な集団関係を想定するためには、基本的にはすべての遺跡の資料に当たらねばならないが、実際のところ各遺跡間で遺物の出土量に差があり、同レベルで遺跡を検討するにはかなりの無理がともなう。幸いながら伊勢湾沿岸地方は、当該期の遺跡の発掘調査が進み、各地域内における主要遺跡が判明している。そしてこれらの遺跡からは一定量の遺物が出土し、地域間の差異をある程度反映していると考えられる。そこで発掘調査がなされた遺跡の報告書記載の資料を、A：正統遠賀川系土器、B：亜流遠賀川系土器、C：削痕系土器、D：条痕文系土器、E：その他の系統の土器（大地形、浮線渦巻文など）に分け、特に壺・甕を中心に、口縁部および体部の点数をカウントし、分析資料の総点数に対する割合で各遺構別および報告書掲載資料全体のレーダーチャートを作成し、各遺跡別の特徴を抽出した^{▼1}。ただし底部に関しては正統・亜流の区別が困難なため分析対象からはずした。同様に条痕文系に関しても底部はカウントしなかった。

分析対象とした遺跡は、次の通りである。尾張…山中遺跡・元屋敷遺跡・朝日遺跡（貝殻山貝塚地点・56B区）・月縄手遺跡・松河戸遺跡・高蔵遺跡、伊勢…永井遺跡・上箕田遺跡・納所遺跡・金剛坂遺跡である。

■遺跡別の傾向

金剛坂遺跡 三重県多気郡明和町

金剛坂遺跡は、中央構造線に沿って東流する櫛田川左岸の段丘上に位置する遺跡であり、いわゆる亜流遠賀川系土器を多量に出土する遺跡として著名である。1970・1989年の2回にわたる発掘調査の結果、I-3から4期^{▼2}を中心とした土器が出土しているが、遺構に伴う資料は少ない。全体の約9割近くが遠賀川系土器であり、条痕文系土器は1割にも満たない。また、遠賀川系は、従来から指摘されているように亜流遠賀川系土器の占める割合が他遺跡に比して高い。

納所遺跡 三重県津市納所町

納所遺跡は、津市の北方を流れる安濃川左岸に位置する伊勢湾西岸地域最大の拠点集落である。1973～75年にかけて発掘調査が行われた。当該期の資料は他遺跡に比して豊富であり、I-1～4期にわたる資料が検出されている。しかし、報告書記載の資料は極一部であり、各時期における傾向はつかめないので、報告書に掲載されている壺・甕の文様構成表から類推して全体の傾向を把握した。金剛坂遺跡と同様に遠賀川系の比率が高く、な

▼1 報告書掲載の資料が全てではないし、また報告書の掲載にあたって恣意的な面が排除されているかどうかは判断できない。しかし、現状で我々が検討することができる資料は報告書によらねばならず、今回は敢えて報告書掲載資料に限って分析を実施した。

▼2 遺跡の時期比定に関しては、石黒立人1992「尾張地方を中心とした弥生時代前期の諸相—遠賀川系土器」「山中遺跡」の編年観によった。

かでも亜流の占める割合が高いのが特徴的であり、条痕文系は1割にもみえない。しかし、報告書によれば遠賀川系土器進出段階（I-1～2期か）には亜流がみられないという記述があり、それが事実とすると、初期段階は上箕田遺跡、永井遺跡と同様な傾向を示していたのかもしれない。時間の変遷とともに傾向は変化している可能性が高い^{▼1}。

上箕田遺跡 三重県鈴鹿市箕田町

上箕田遺跡は、鈴鹿川右岸の標高5m程度の自然堤防上に位置する遺跡であり、1960・1968～69年の2回にわたる発掘調査が実施され、納所遺跡と同様に拠点集落に相応しい遺構・遺物が検出されている。当該期の資料も充実しており、I-1～3期に相当する資料が出土しているが、残念ながら遺構に伴う資料はみられない。全体的な傾向としては、遠賀川系土器のみで占められ、条痕文系は認められない。また、遠賀川系土器は正統タイプが主流であり、金剛坂・納所遺跡で顕著であった亜流タイプは極端に少ない。

永井遺跡 三重県四日市市尾平町

永井遺跡は、三滝川が形成した沖積地を望む標高20～30m程の台地南端部に集落を形成した遺跡である。1972年に発掘調査が実施され、複数の環濠が巡らされた集落の様相が明らかにされている。遺構出土の資料も多く、概ねSD1・2→SD3・4→SD5・6の順に環濠が掘削されたと想定され、時期的にはI-2・3期前半→I-3期後半→I-3後半・4期に相当すると考えられる。各遺構ごとの傾向としては、I-3期後半以降に亜流・条痕文系土器がやや増加する傾向が認められるが、各時期ともに正統タイプが主流をなし、他の系統の占める割合は少ない。

高蔵遺跡 名古屋市熱田区高蔵町

高蔵遺跡は、名古屋市を南北に半島状に貫く熱田台地の東端部に位置する。調査の歴史は古く学史上著名な遺跡であるが、当該期の良好な資料は、1981・1985年の名古屋市教育委員会による発掘調査で出土しており、永井遺跡と同様に複数の環濠が巡る集落の様相が判明してきている。ここでは1985年の調査で検出されたI-3期に比定できるSD03出土資料を中心にその傾向をつかんだ。概ね正統タイプの遠賀川系土器が主流であり、条痕文系土器がやや増加する傾向が認められるが、亜流タイプの比率は少ない。

朝日遺跡 愛知県西春日井郡清洲町他

朝日遺跡は、標高2m以下の沖積地に立地する伊勢湾沿岸地方屈指の大集落である。弥生時代前期の土器が出土する地点は遺跡の南西部に位置する貝殻山貝塚地点や二反地貝塚地点など広範囲にわたる可能性が考えられるが、点的な調査が多く当該期の集落の様相については判然としない。ここでは、発掘調査によってある程度の概要を知ることのできる

▼1 調査を担当された伊藤久嗣氏によれば、遺物の出土状況から、遠賀川系土器に進出段階には亜流はみられないという。伊藤久嗣1980『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県教育委員会

貝殻山貝塚地点（1971年調査）と愛知県教育サービスセンターによる56B区（1981年調査）出土資料を用いて遺跡の傾向を把握した。

貝殻山貝塚出土資料は、Ⅰ－１～３期に比定できる資料であり、９割以上が正統タイプの遠賀川系土器で占められ、北勢地方の上箕田遺跡、永井遺跡など同様の傾向を示す。対して56B区出土資料は、貝殻山貝塚出土資料よりは若干新しい様相が看取できⅠ－３・４期に比定される。その土器群からみられる傾向は、貝殻山貝塚でみられた様相とは対称的といえるほど異なっており、条痕文系土器が約５割を占め、正統タイプの比率が極端に減少する。垂流・削痕系は少数ながら存在する。

月縄手遺跡 名古屋市西区比良

月縄手遺跡は、庄内川右岸の自然堤防上に立地する遺跡であり、1987・1993年の調査によって、Ⅰ－２・３期前半に属する小規模な環濠集落の様相が明らかにされた。出土資料は豊富であり、全体的に正統タイプの遠賀川系土器の占める割合が高く、高蔵遺跡など同様の傾向を示す。しかし、他遺跡では少ない外面ヘラ削り調整の甕、いわゆる削痕系の比率が高く特徴的である。また、垂流および条痕文系土器も若干みられるが客体的な存在である。

松河戸遺跡 愛知県春日井市松河戸町

松河戸遺跡は、庄内川右岸の標高15m前後の沖積地に立地する遺跡である。遺跡の詳細は第Ⅱ章の遺構および遺物編に譲るが、半円形に広がる小規模な環濠集落が明らかにされている。出土土器は概ねⅠ－３・４期に比定される。全体的に正統タイプの遠賀川系土器の占める割合が高く、条痕文系土器がやや増加する状況がうかがえる。高蔵遺跡と同様の傾向が認められる。

山中遺跡 愛知県一宮市萩原町

山中遺跡は、尾張北西部の木曽川によって形成された標高5m前後の沖積地に立地する。尾張地方における弥生時代後期の土器編年上のタイプ・サイトとして学史上著名であるが、1980・1991年の発掘調査によって、環濠、住居、方形周溝墓など弥生時代前期の集落構造を考究するうえで重要な成果をもたらした。出土土器は、概ねⅠ－３後半から４期に比定されるものであり、全体的に遠賀川系土器の占める割合が高いが、条痕文系土器も４割近い比率で存在する。特徴的なのは垂流タイプの多さであり、とりわけ煮沸具の９割以上が垂流タイプで占められる。

元屋敷遺跡 愛知県一宮市丹陽町

元屋敷遺跡は、五条川右岸の標高5m程の沖積地に立地する。1961年の発掘調査によって古墳時代初頭の土器群（いわゆる元屋敷式土器のタイプ・サイト）とともに大量の弥生時代前期の土器が出土したが、明瞭な遺構は検出されなかった。出土資料は、概ねⅠ－３期前半代に比定できるものである。全体的には正統タイプの遠賀川系土器が主流であるが、

条痕文系土器も一定量存在する。この遺跡の特徴は、かつて紅村 弘氏が指摘されたように、煮沸具における削痕系土器の占める割合の高い点にあり、全体の2割以上の比率を占める。

4) 伊勢湾沿岸地方における弥生前期の集団関係

■集団の設定

前節で分析結果を示した遺跡は各地域の主要遺跡と考えられ、これらの遺跡が示す傾向は当然周辺地域の様相を色濃く反映しているものと考えられる。これを外来の土器文化である遠賀川系土器の受入状況より分類するとP113図のような地域に区分することができるであろう。

A型

北勢地方から尾張南西部・名古屋台地に至る地域 正統遠賀川系土器が壺・甕ともに主体をなす地域であるが、尾張地方では遺跡によってやや様相が異なる。

B型

2つの地域に分類できる。

B1：壺・甕ともに亜流遠賀川が主体を占める地域 伊勢中・南勢地方を中心とした地域

B2：正統遠賀川系土器が主体であるが、煮沸具に関しては亜流・削痕系土器を使用する地域 尾張北西部を中心とした地域

C型

条痕文系土器が主体をなす地域 三河地方以東の地域

以上のように共通する土器要素を持った3つの地域を当該期における伊勢湾沿岸地方の基本的な集団関係の枠組として設定できるであろう。

■若干の問題

伊勢湾沿岸地方に分布する弥生前期の集団のうち、遠賀川系土器集団に関してはAおよびB型が相当するが、この両類型を中心に、1：空間的な問題と集団の成立、2：地域と時間的な差異、3：集団関係の展開と崩壊についての3点にしほり、若干の問題を考えてみたい。

▼¹ この存在については、細部で若干異なるが、かつて紅村 弘氏が、津島型遠賀川式土器、亜流遠賀川式(金剛坂式土器)、削痕遠賀川式が主体的に分布する地域に、また、高橋信明氏が尾張地方の遺跡を弥生A型、弥生B型に整理された状況とほぼ対応する結果となった。

1：空間的な問題と集団の成立

遠賀川系土器集団の分布状況は、P113図に明らかなように、A型地域を挟んでB型の遺跡群が展開する状況を読み取ることができる。これを前代の縄文晩期突帯文土器の分布状況と重ね合わせれば、従来から指摘されているように、ほぼA型地域は空白域に、B型地域は突帯文系土器の分布域にオーバーラップする。これは、B型地域の主要な基盤が伝統的な縄文晩期文化のなかで培われたことを示し、対してA型地域は、伝統的な観念に縛られることなく、新たな文化を吸収しやすい地域であったと想定することができるであろう。

遠賀川系文化の伊勢湾沿岸地域への波及に関しては、様々なルート論が展開されているが、一元的なルート論のみでは捉えられない錯綜した状況が複数の集団関係の存在から推定される。石黒立人氏は、この遠賀川文化の波及について第1段階－遠賀川系集団の点的な進出および拠点集落の形成、第2段階－第1段階の遺跡を核とした線・面的な拡大という段階的な進出を考えている^{▼1}。

伊勢湾沿岸地方における当該期の拠点集落は、中之庄遺跡、納所遺跡、上箕田遺跡、朝日遺跡、西志賀遺跡などがあるが、いずれもA型地域に属する。B型地域には現状では単発的な集落のみが存在し、時間的にみてもこれらの遺跡はA型の拠点集落より後出して登場するようである。また、B型地域に広く分布する亜流遠賀川系土器、削痕系土器は在地の縄文晩期突帯文土器が遠賀川系文化の流入により成立した変換類型^{▼2}であり、当然時間的には正統タイプの遠賀川系土器より後出するはずである。

以上の点を石黒氏の説をかりてまとめれば、第1段階－A型地域にアットランダムな形で拠点集落が形成される。第2段階－A型地域の拠点集落から相乗的な新文化のB型地域への波及と単発的な遺跡群の誕生という図式が考えられる。つまり文化レベルとして優位にたつA型地域・集団の成立が、伝統的な観念に縛られた周辺地域内部に変換的变化を引き起こし、個性的な土器を創出するB型地域・集団を誕生させたと推定されるのではないであろうか。

2：地域と時間的な差異

伊勢湾沿岸地域の弥生時代前期の遠賀川系土器集団は、先に記したように大きく3つの類型の存在を指摘できる。しかし、P113図に示したレーダーチャートには大まかな傾向の類似性はあっても、若干の差異を見いだすことができ、それは地域的および時間的な問題が大きく関わってくると考えられる。

A型における上箕田遺跡・永井遺跡と尾張南勢部に位置する月縄手遺跡・高蔵遺跡・松

▼1 石黒立人1986「弥生社会の成立と解体の理解に向けて－1」『考古学の広場』3

▼2 服部信博1992「尾張地方を中心とした弥生時代前期の諸相－亜流について」『山中遺跡』

河戸遺跡の状況は、ともに正統遠賀川系土器を主体とする遺跡でありながらも、後者の遺跡は一定量の他系統の土器が出土している。これらの遺跡は概ね他系統の土器を出土する地域と接しており、地域的な交流の結果と考えられよう。

B1型における金剛坂遺跡の分析結果は、納所遺跡とほぼ同様の傾向をみせ、近接した時間幅（I-3から4期）を両遺跡に与えることができよう。しかし、納所遺跡における各時期別の傾向が不明であるが、先述したように遠賀川系土器進出段階には亜流はみられないという状況からみれば、納所遺跡においてはI-3期以降急激に亜流が増加したことになる。単なる地域的な交流だけの問題であろうか。

B2型における山中遺跡・元屋敷遺跡の状況は、煮沸具のみを前者は亜流、後者は削痕系を主に使用する傾向が認められた。この近接した地域内に存在する両遺跡の差異は、削痕系が概ねI-3期には消滅するという時間的な問題が大きいのであろう。

3：集団関係の展開と崩壊

伊勢湾沿岸地方に成立した複数の遠賀川系集団は、どのような展開をみせるのであろうか。

A型における遺跡群の動向は、沖積地に立地する納所遺跡、上箕田遺跡、朝日遺跡、西志賀遺跡などは集落を拡大させながら順調に拠点集落として次代の中期にまで継続する。しかし、台地上に環濠集落をつくりあげた永井遺跡、高蔵遺跡などは現状の資料をみる限り中期にまでは継続しない。

一方、B型の遺跡群は、先述したように単発的な小集落が多く、一宮市の河田遺跡など一部の遺跡で中期にまで継続する場合もみられるが、現状では前期段階をもって断絶してしまう遺跡が多い。とりわけ、洪積台地・段丘上に多くの遺跡が立地する南勢地方においては弥生後期から古墳時代初頭段階まで拠点集落の形成はみられない。

このA型・B型の遺跡群における動向は、概ね沖積地におけるA型の発展とB型の衰退としてまとめることができ、これらの状況は一体何を意味しているのであろうか。

伊勢湾西岸地域の拠点集落納所遺跡と東岸域の拠点集落朝日遺跡56B区の分析結果が興味深い。この両遺跡はいずれも沖積地に立地するA型集団内で誕生し、弥生時代を通して伊勢湾沿岸地方をリードする拠点集落となる。この両遺跡において共通する現象がI-3期以降に急激に正統タイプ以外の土器—納所遺跡においては亜流が、朝日遺跡56B区においては条痕文系—が異常とも言えるほど急増することである。この状況は、非常に大胆な推測ではあるが、文化レベルにおいて優位にたつ沖積地のA型集団の中へ、劣等的なB・C集団が融合していく過程を物語り、縄文的な基盤の崩壊と弥生的な社会構造の浸透を意味しているのではないであろうか。

この推測が許されるならば、I-3期以降、農耕を基盤とした弥生社会の構造が浸透する

ことによって、まず土器に現れた変換作用が生活様式全般におよび、農耕に不適な要素は排除されていったと考えられる。それがB型集団の存在をゆるがすことになり、これらの集団・地域においては弥生中期段階まで継続して集団を営むことができなかったと言えるであろう。またB型地域の山中遺跡においては、I-4期に洪水の影響を受け集落が衰退した状況がみられ^{▼1}、広域的な災害および環境の変化も集団間の枠組みを大きく変化させた一要因としてあげることができるのかもしれない。

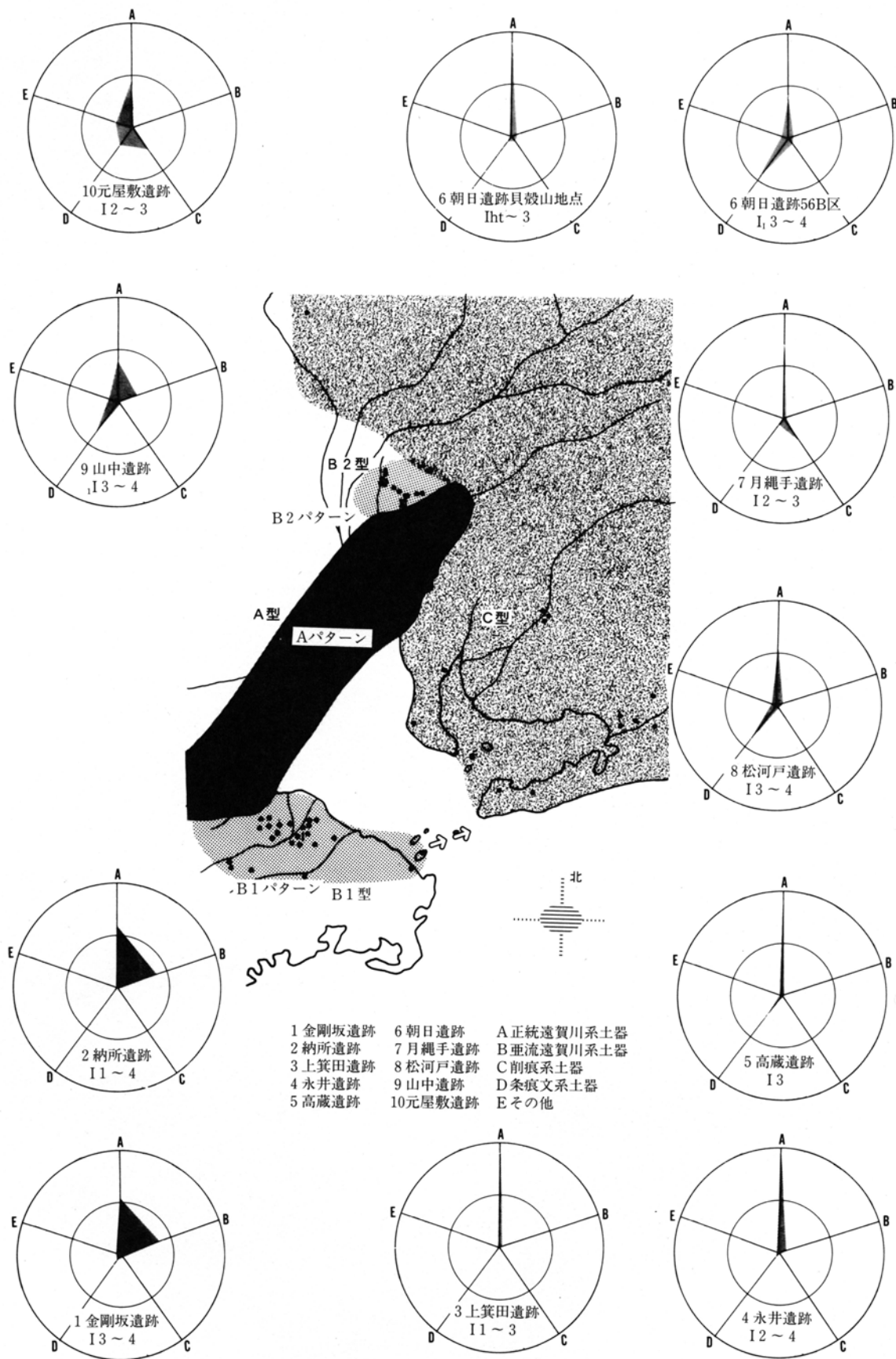
5) おわりに

以上、伊勢湾沿岸地方における弥生前期段階の集団関係について複数の集団の存在を明示して考えてきた。しかし、筆者の力量不足から大胆な推測を重ねただけの推論的なものに終わってしまった。当然、それらの推論に対しては、詳細な検証が必要であり、課せられた問題として、今後に望みたい。

参考文献

- 愛知県教育委員会 1972 『貝殻山貝塚調査報告』
 愛知県清洲貝殻山貝塚資料館 1983・1984 『貝殻山』No.8、No.9
 愛知考古学談話会 1985 『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題』資料編1
 (財)愛知県埋蔵文化財センター1990 『月縄手遺跡・貴生町遺跡』
 (財)愛知県埋蔵文化財センター1994 『月縄手遺跡・貴生町遺跡(II)』
 (財)愛知県埋蔵文化財センター1992 『山中遺跡』
 一宮市 1968 『新編一宮市史』資料編2-弥生時代
 一宮市教育委員会 1982 『尾張病院山中遺跡発掘調査報告書』
 上箕田遺跡調査会 1970 『上箕田弥生式遺跡第2次調査報告』
 名古屋市教育委員会 1982 『高蔵遺跡発掘概要報告書』
 南山大学人類学博物館 1988 『高蔵貝塚(III)』人類学博物館紀要10
 三重県教育委員会 1980 『納所遺跡-遺構と遺物-』
 三重県教育委員会 1985 『昭和59年度農業基盤整備地域埋蔵文化財発掘調査報告』
 明和町教育委員会 1971 『金剛坂遺跡発掘調査報告』
 四日市市教育委員会 1973 『永井遺跡発掘調査報告』

▼1 服部信博1992『A期の遺構と遺物の変遷』『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集



弥生時代前期の遺跡分布とレーダーチャート